3F-06

日本語入力時における「変換」操作の問題点

長澤　直子[†‡]

大阪成蹊短期大学[†]　　立命館大学大学院社会学研究科[‡]

はじめに

キーボード操作による日本語入力が煩わしいか否かは、タッチタイピングが出来るか出来ないかだけで決まるものではない。意外に見落とされがちなのが、変換操作に関する部分である。

ひらがなを入力してから目的とする文字種に変換するまでの手順は、様々なパターンが存在する。一例を挙げると、Windows PC付属のMicrosoft IMEであれば、ひらがなを漢字に変換するための操作は［変換］キーが担ってくれるが、それを確実にカタカナへ変換するための操作は［F7］キーか、あるいは［無変換］キーが担ってくれる[1]。ところが、［変換］キー以外のキーによる変換操作に関する知識が乏しいために、余計な手間をかけているユーザーが少なくないように見受けられる。

そこで、大学入学直後の新入生を対象に調査を行い、細かな変換操作の問題点を明らかにする。今回は、主にファンクションキーによる変換と連文節変換に焦点を当てている。

1. ［変換］以外のキーによる変換機能のあゆみ

PCでの［変換］キー以外のキーによる変換操作のあゆみを見ていくと、1989年頃、MS-DOS時代の一太郎Ver.3に付属していた日本語入力システムATOK6では、既に現在と同じく［F7］キーでひらがなをカタカナに変換することができるようになっていた[2]。また、［F6］キーでひらがなに、［F8］キーで半角カタカナに、それぞれ変換できるようにもなっていた。その後、1997年発売のWord97に付属していたIME97では、［F7］［F8］キーを連続して押すと末尾からひらがなに戻っていく機能が追加されており、同じく［F9］キーで全角アルファベット、［F10］キーで半角アルファベットに変換され、連続して押すと小文字→大文字→先頭のみ大文字→小文字と変換内容が変化するという、現在のスタイルが確立されている[3]。また、1998年発売のWord98に付属していたIME98で、［F6］キーを連続して押すと先頭からカタカナに変換される機能が追加されている[4]。

つまり、1998年頃には、現在のスタイルがほぼ確立されていたと言える。そこから15年以上が経過しているが、若者は果たしてこれらの機能をどの程度認知して、利用できているのだろうか。

2. 調査の内容とその結果

入学直後の短期大学1回生（文系）に対して、2種の調査を実施した。1つは実際のオペレーションを記録し、かつ、ビデオに撮影したもの、もう1つは質問紙調査である。学生の使用マシンはOSがWindows7であるため、Windows7に付属するMicrosoft IMEでの文字入力方法に基づいたものとなっている。

2.1. オペレーションの記録による調査

中野による先行研究[5]をなぞらえて、学生の日本語入力を、キー操作の記録を元にして分析するため、2015年4月に12名の学生を対象として調査を実施した。被験者には3つの例文を入力してもらい、そのオペレーションを記録した。3つの例文は、次の内容である。

- 踏切では一旦停止して、歩行者の邪魔にならないよう十分に注意すること！
- ムーミン(moomin)のキャラクターには、フローレン、ミィ、スナフキンなどが登場する。
- 兵庫県の香住駅、鎧駅付近は、冬場のカニで有名である。

これらの例文の中で、［変換］キーの操作だけでは変換が難しいのは、主に「フローレン」「ミィ」という固有名詞の部分である。これらに対して、［F7］キーのオペレーションをしたのは、12名中4名（33.3%）であった。［F7］キーを操作せずに対応しようとした者の中には、「みぃ」を「ミィ」に変換しようとして、［変換］キーを最大で49回連打したケースがあった。

また、連文節変換を使用せず、文節や単語ごとに細かく区切って変換操作をするケースが少なくないことも見逃せなかった。そして、変換操作を終えるごとに毎回［Enter］キーを押すというオペレーションをする者もいる。改行以外で必要な［Enter］キー操作は、次から英数字や

Problems in Japanese Language Input Operation

†‡ Naoko Nagasawa
† Dept. of Business Management and Accounting, Osaka Seikei College
‡ The Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University

Copyright ©2016 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.

記号を入力するといった理由で事前に確定しておきたい、あるいは改行をするからその手前で確定しなければならないといった箇所以外には特に存在しないため、8回あれば事足りる内容だったが、最大で60回を記録している。

2.2. 質問紙調査

2015年6月に、47名の学生を対象とした質問紙調査を実施した。まず、授業の中で日本語入力に関する様々な方法について丁寧に説明し、実際に操作も行ってオペレーションを確認した。その上で、「ファンクションキー[F6][F7][F8][F9][F10]の働きを知っていましたか？」という質問をした。2015年度における結果は、図1のようになっている。確実に「知っていた」と答えたのは19.1%で、59.6%は「一部知っていた」、21.3%は「知らなかった」ということであった。

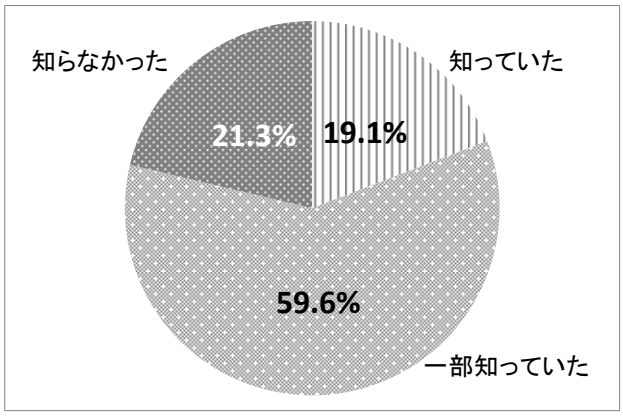

図 1 ファンクションキーによる変換に関する認知度（2015 年度）

調査の内容について、経年で変化がみられるかどうかを確かめるため、2009年度より毎年同一内容で調査を行ってきた。過去7年間における結果は、年度によって多少の差は見られるものの、毎年のように3層に分かれている。

また、連文節変換に対する認知度との関連性を見るために、［→］［←］キーを用いた文節移動の方法を知っていたかどうかという質問に対する回答との間で、クロス集計を試みた。その結果が、表 1 である。

表 1　ファンクションキーによる変換操作と連文節変換に必要な操作の認知度

（単位：%）

		［F6］～［F10］の働きを		
		知っていた	一部知っていた	知らなかった
［→］の働きを	知っていた	14.9	40.4	10.6
	知らなかった	4.3	19.1	10.6

両方をきちんと理解していたのは47名中7名で、14.9%という結果であったが、ここからさらに、連文節変換のために欠かせない［Shift］＋［→］［←］キーを用いた文節区切りの修正方法を知っていたという者のみに絞り込んだ場合は4名となり、8.5%まで認知度が下がってしまう結果となった。

3. 考察

キーボードによるスムーズな日本語入力を阻害する要因を検討するため、変換操作における［変換］以外のキーの使い方を中心に、学生のオペレーション実態を見てきた。

まず、ファンクションキーによる変換操作については、2015年度の質問紙調査結果を見ると約20%程度の認知度となっている。「一部知っている」が約60%だが、「一部」をどう評価すればよいだろうか。実際のオペレーションによる調査結果を見ると、カタカナ変換のために［F7］キーを使ったのは33.3%であった。20%よりは高い結果となっているため、「一部知っている」の60%が食い込んでいると考えてよさそうだが、知っていても実際にはあまり使えていないという可能性が考えられる。

次に、連文節変換とファンクションキーによる変換操作について、両方をきちんと理解していた者は 1 割を切っていることが明らかになった。このことは、日本語入力システムの機能に対する恩恵をしっかり受けることが出来ておらず、大きくは、「ひらがなを入力したら［変換］キーで変換操作をすればよい」ということだけが理解できているとも捉えられる結果である。

若者のPC利用を促進するためにも、こういった阻害要因を排除してスムーズに利用するための技能習得が必要で、それには、なるべく早い段階で系統的に指導する方法を確立することが重要ではないかと考える。

註と参考文献

[1] たとえば、Mac（ことえり）では［Control］＋［K］でカタカナに変換される。
[2] 日下部孝一『一太郎Ver.3テクニカルマニュアル』新星出版社，1989，19
[3] マイクロソフト株式会社監修『Microsoft® IME97セミナーテキスト』日経BPソフトプレス，1997，22
[4] マイクロソフト株式会社監修『Microsoft® IME98セミナーテキスト』日経BPソフトプレス，1998，36
[5] 中野靖夫「コンピュータの操作過程の解明（４）：文書作成時の初心者の操作行動」『上越教育大学研究紀要』Vol.13，No.2，1994，161-176

Copyright ©2016 Information Processing Society of Japan.
All Rights Reserved.